



暑かった夏も何とか秋にバトンタッチ。
虫の音、秋鳥、満月・・・
自然にも美しい秋がいっぱいです。
俳句に詠むには、絶好の季節ですね。
今回もうさおさん、健さんに投句していただきました。
さっそく拝見しましょう。まずうさおさんの句です。

葉の色がなお濃くなりて夏盛り

確かに緑の色にも夏が深まるにつれて変化があるようです。
良く観察されていますね。このままでも良いと思いますが、

*葉の色の尚濃くなりて夏盛り

*葉の色の尚くつきりと夏盛り

などでも葉の色がより良く見えてきます。

いかずちの鳴るや雨そら落ちるよう

雷が鳴るとまるで空が落ちるように感じる、という事ですね。
面白いと思います。鳴るやと切れ字を使うと、そこで一旦大きく切れます。
そうすると句の流れが止まってしまう。この場合は切ってしまうわずに、
自然な言葉で続けてもよいのでは、と思います。

*いかずちの鳴り雨空の落ちるやう

不気味やな蝉も鳴かない今年なり

蝉鳴かなかったのですか？こちらでは煩い程の蝉しぐれでしたよ。都会と田舎の違いかな・・・でも確かに蝉の鳴かない夏は不気味です。面白いです。

母去りてまだ片付かぬ夏の家

思い出も片付けてしまいそうで、それもあって手をつけたくないお母様の部屋。そんな事も感じられる句です。

*母逝きてまだ片付かぬ夏の家

還暦や同窓会の熱きこと

還暦を迎えられて集まった男女、賑やかな会話まで聞こえてきそうです。
無季でも良いのですが、季語を付け加えるとより状況が鮮明になります。
字余りでもリズムが良ければ気になりません。

*還暦の夏同窓会の熱きこと



続いて健さんの句です。

巻貝の殻に潮水夏果つる

夏の終わりに訪れた海でしょうか・・・

小さな物（この場合は巻貝）からだんだんに大きな景色に移していく。

巻貝に付着した潮水、海、夏の終わり・・・物語が広がります。

＊巻貝の殻の潮水夏果つる

雷激しネオン瞬く電気街

この句は季語の部分と景色を一旦区切った方が、情景が浮かぶのでは・・・と思います。

＊遠雷やネオン瞬く電気街

＊雷鳴やネオン瞬く電気街

暗がりの猫と眼が合ふ夜の秋

猫好きの私の事、この感じ良く解ります。猫って、立ち止まってこちらをじっと見るんですよね。何気ないけれども面白いです。夜の秋ってまだ夏なのだけれど、夜になるとなんとなく秋を感じる夏の夜の事。秋の夜ではないのです。

故郷の山より高し雲の峰

この句も情景がはっきり浮かびます。季語の使い方がお上手ですね。

＊故郷の山より高く雲の峰 でも良いかな。

不意をつき噴水高く噴き上げり

面白い。一瞬をとらえた良い句ですね。＊不意をつき噴水高く上がりけり
う～ん平凡・・・原句の方が勢いがあるかな。

一病に詳しくなりぬ夜の秋

これも良いですね。ご病気の事をいろいろな書物で調べたり、ネットで調べたり・・・
少し凌ぎやすくなった夜を過ごしていらっしゃる様子が目に浮かんできます。

暑さが去ったと思ったら、今度は台風・・・大雨に地震。日本は地球はどうなってしまうのでしょうか・・・私たちが出来ることから、地球にやさしくしなくては・・・
心からそう思います。

らせん階段芥引連れ秋の風

温め酒ぼろり男の愚痴ひとつ

yuko

